（金のエンジェル賞　小学生中高学年の部）

耳を澄ませば波の音

小五・近藤　翼

「あの子って変だよね。」

五年三組の廊下で話す女子グループの会話が耳に入ってきた。グループの中で一番うわさ好きの黒川さんが意地悪そうに、わざと大きな声で言った。

「知ってる？　波音って変な絵とか描いてるらしいよ。」

そばにいたクラスメイトが「コワッ」とか、「やだー」とか言って騒いでいる。

波音ちゃんは、たしかにちょっと不思議な女の子だ。いつも黒ずくめのファッションで、無口だし、たまに長い前髪の奥でキラッと目が光ると、思わず私もビクッとしてしまうことがある。だけど、休み時間ノートに何かを熱心に描く彼女の姿は他の誰とも違う特別な光を放っていた。

夏休み前の恒例行事、クラス対抗水泳大会がいよいよ一週間後に迫った日、波音ちゃんが腹痛で欠席をした。私は家が近いので、宿題のプリントを届けることになった。

波音ちゃんの家は、古い洋風の立派なお家だ。昔、波音ちゃんの祖父母が住んでいた家だそうだ。家のインターホンを押すと、大きな扉がギギギィーと音を立てながら開き、前髪で顔の半分が隠れた波音ちゃんが出てきた。私はちょっとドキドキして言った。

「た、体調大丈夫？　宿題のプリント、届けに来たんだけど…。」

「わざわざありがとう。よかったらお茶、飲んでいく？」

はじめてちゃんと聞いた波音ちゃんの声は、澄んだ海のように爽やかで、私はちょっとびっくりした。どうしようか迷ったけれど、波音ちゃんと話してみたい気持ちもあったので、家にあがらせてもらうことにした。

波音ちゃんのお母さんが作ってくれた特製クッキーとお茶をいただきながら、私はリビングの本棚を眺めた。たくさんの図鑑や本がぎっしり並べられている。どの本にも「海」とか「魚」とかの文字が入っていて、難しそうなものばかり。

「あの…。波音ちゃんって海が好きなの？」

波音ちゃんはニコッと笑って、うなずいた。

「うん。とくに深海がね。暗くて深い海の中にも、たくさんの生き物がいるんだよ。おもしろいでしょ。」

シンカイ？　聞き慣れない言葉に私は首をかしげた。すると、波音ちゃんは

「ついてきて！」

と言って階段を上っていった。私も慌ててそのあとについて行く。

「ここは私の部屋。美緒ちゃんに見てほしいものがあるの。」

波音ちゃんはそう言って部屋のドアをゆっくりとひらいた。

波音ちゃんの部屋は、カーテンが閉められていて真っ暗だった。段々と目が慣れてくると、暗闇の中で何かが光っている。それは壁に描かれた魚の絵だった。私の背丈よりもずっと大きくて、白銀色に長く細い美しい体。ヒレは、まるで真っ赤なリボンのようだ。その他にも、目が突き出た魚や、頭が透明な魚など、特徴的な魚がたくさん描かれていた。

「これ、暗闇で光る絵の具で描いた、リュウグウノツカイっていう深海魚なの。すぐそこの駿河湾でも発見されたことがあるんだよ。」

「えっ?!　そこの駿河湾で？」
「そう。近くにある海なのに、意外と知らないことって多いよね。」
たしかにそうかも。こんな近くに、こんな深くて広い世界がある
なんて知らなかった。日本一深い駿河湾のこと、その深くて不思議
な世界を、こんな素敵な絵で表現する波音ちゃんのこと。もっと知
りたいし、クラスのみんなにも、ちゃんと知ってほしい。でも、ど
うしたらいいんだろう…。私はもう一度、光り輝く深海魚たちを見
つめた。
水泳大会当日、私と波音ちゃんはいつもより早く学校に来ていた。
校舎内には、まだ生徒たちはいない。事務室で鍵をもらい、誰もい
ない静かな教室に入る。私達の足音だけが響いている。
「ねぇ、本当に描けるかな。」
波音ちゃんはまだ心配そうな様子だ。私が右手でグッドサインを
出すと、彼女はチョークを手に取った。黒板をじっと見つめ、真剣
な表情で、大きな頭のクジラや、脚の長い巨大なカニ、そしてあの
時見た美しいリュウグウノツカイを次々と描いていく。どの深海の
生き物たちも気持ちよさそうに黒板の海を泳いでいる。黒板の真ん
中には、「輝け！　5年3組！」のメッセージを書いて、最後に「N
AMINE」のサインを入れると、彼女は私の方を振り向いた。深
海の生き物たちと同じ、いきいきとした、いい表情だった。
時計が七時四十分を指した頃、勢いよく教室の戸が開いた。クラ
スのお調子者の男子たちだ。みんな黒板の絵をまじまじと見つめて、
「すげー」と叫んでいる。その後もたくさんのクラスメイトたちが
「すごくキレイ！」と黄色い声を上げている。そして、黒川さんも
教室に入ってきた。思わずドキッとする。彼女はじっと黒板を見つ
めて、波音ちゃんに言った。

「絵、意外と上手いじゃん。もしかして泳ぐのも得意だったりする？」
「うーん。ミツクリザメくらいかなぁ。」
波音ちゃんがニコニコしながら答えると、みんなで
「わかりにくっ。」
と言って、笑い合った。
窓の外には、夏の空にソフトクリームみたいな入道雲と、いつもより深い青色の海が、キラキラと美しい波音を響かせていた。

画：イシヤマアズサ